

未来学談話会講演録

特集：未来学の学問的前提

報告と対話：言説史・学術史から未来を志向する—心理学史を事例として

天ヶ瀬 正博・田中 希生・西谷地 晴美

天ヶ瀬：野村学部長から、広く色々な意見が活発に出るような話をするように、ということでしたので、そうなることを望んでいます。私の専門とする認知心理学では、現在、人類学等と連携するかたちで、人類史において「認知革命」と言われる出来事が七万年前あたりになにあったという人類進化説や、認知考古学という分野が出てきています。また、生物学と連携するかたちで、進化心理学という分野も確立されました。さらに、脳科学と認知心理学と人類学の融合という議論が、よくなされております。それに対して、この会では文学部内での心理学と他分野との融合の可能性を探ろうと思います。

担当する心理学概論の授業で、学術心理学と臨床心理学それぞれを志向する学生がいて、統合的視点で心理学を論じることが問題となりました。レジュメには「心理学の二重の切断」と書いています。まず、19世紀以前以後では、心理学は全く違うということです。それから、20世紀に、学術心理学と臨床心理学に二分されたということです。そのため、何ををもって心理学概論とするか苦慮しました。そして、本来の心理学という観点で、古代から現代までの心理学史の授業を行いました。そのことを通じて、「人文学の危機」そして「人間性の危機」という問題を、考えるようになりました。それは80年も前のドイツの哲学者エドムント・フッサールの問題提起に由来します。彼は、「事実学」となることでヨーロッパの学術が危機に陥り、ひいては人間性の危機につながる、と論じました。核心には、心理学が事実学となることの危機がありました。現在、心理学は、事実学どころか、技術論となっています。他方、21世紀になって、科学者の数で国際競争力が決定されるという、認知資本主義によって、人文学は無駄だという発言が、なされるようになっていきます。ポピュリ

ズムや反知性主義も言われています。

また、「動物化」という問題です。これは、アレクサンドル・コジエヴが概念化して、東浩紀やフランシス・フクヤマが論じたことです。消費社会になって、他者に対する欲望を持たず、自身の欲求を満たすことだけで満足する人々が増え、互いに関わり合って議論を戦い合わせることがなくなる。「観念を巡って、人間同士や人間集団間で対峙すること」がなくなる。そして、ヘーゲルの言う「歴史」が終焉する。そういう問題意識です。あるいは、トランプ政権の誕生によって顕著に言われるようになった、社会の分断が進んでいることへの懸念があります。また、ジャン・フランソワ・リオタールが、「知識人の終焉」とも言いましたが、人類社会における「メタ物語」、もしくは「大きな物語」の喪失という問題です。それらの問題意識において、大学の教員と学生が何をすべきか、何をなせるか、考える必要があります。そこで、本来の心理学について、古代ギリシアまで遡って確認することを通して、人文学、さらには学術が、本来的にどのようなことであり、将来的にどのような可能性があるか、考えたいのです。

心理学は古代ギリシアにおいて、しかも古代ギリシアのみににおいて成立しました。それゆえ、なぜ古代に、そして、なぜギリシアのみで、どのようにして言説が構成または構築されて、心理学が成立したかが問題となります。断っておかなければならないことは、「こころ」の概念が日本とは違うことです。日本における「こころ」とは、「感情」や「思い」などと言う場合が多いと考えられます。それに対して、たとえば、英語の「mind」は、「精神」や「理性」という訳が、意味的に近いと言えます。それゆえ、「精神」を考える心理学が、なぜ古代ギリシアのみににおいて成立したのかが問いとなります。この問いによって見

えてきたのが、古代ギリシアにおける神話から、西洋哲学・西洋学術の社会－歴史的な構築過程であり、19世紀ドイツ連邦での学術間闘争における、心理学の敗北です。この敗北によって、心理学は、事実学としての純粋学術や、技術論や応用・臨床へと活路を求めたのです。そして、自身の本来的な使命も歴史も忘却または破棄しました。20世紀には、学術全般が変容し、人文学は危機に陥りました。

心理学の成立には、まず、古代ギリシアの特殊性を考えなければなりません。たとえば、ドイツの哲学者ハンス・ガダマーは、「ドイツ語と同じで、古代ギリシア語にも中性名詞があって、中性名詞は、『存在』を記述する言葉だ」と論じて、それを古代ギリシアにおける哲学の成立理由にしています。ただし、そこには、古代ギリシアが、現代と比肩する、政治思想と政治制度を有する「文明社会」であったという、欧米に根強い選民意識が根本にあります。そして、ドイツ文化は、人類史において燦然と輝く「古代ギリシア文明」の、正統な継承者であるという意識があります。しかし、古代ギリシアは文明ではなく、いわゆる「部族社会」でした。古代ギリシアのポリスは、歴史に現れる少し前まで、「無頭地域集団」すなわち世襲的な首長も支配者もない地域集団であり、それらが、他所にはない、歴史的、地理的、社会的、文化的要因によって、領土と生産を管理する「首長制領邦」に向かって変化していった。その間の、高度で洗練された文化は、エジプトなどの古代先進文明の影響によることだったのです。たとえば、「王」と邦訳される、「バシレウス」という語は、ポリス内の各氏族の長にも、ペルシアのシャーにも、エジプトのファラオにも用いられました。これは、南米アマゾン流域のトゥピ-グアラニ語族と括られる部族間で、「カシケ」という語を氏族長からインカ皇帝までに対して用いるのと同様です。考えられることは、古代ギリシアのバシレウスは部族長であり、ポリスは部族長が統率する、いわゆる「部族社会」であったということです。

歴史学者マーティン・バナールの「ブラック・アテナ仮説」は、紀元前二千年紀に古代エジプトが地中海全域に進出しており、古代ギリシアの文化的基盤を造ったのも、黒人のエジプト人たちであるとす

る説です。これは、彼が「古代モデル」と呼ぶ、ヘロドトスによる古代ギリシアの起源論とほぼ同じです。それに対して、19世紀に、ドイツ連邦が同じ白色人種として英仏の先進国と肩を並べるために、西洋文明は白人の「アーリア人」が造り上げた「古代ギリシア文明」にはじまるとする説が、ドイツ連邦で、でっち上げられたのだと、バナールは主張しています。バナールの説が正しくないとしても、彼が示した様々な史料から、紀元前一千年紀においても、古代エジプト文明が、古代ギリシアに対して、文化的に強い影響力を持っていたのは明らかです。エジプトなどから高度な古代先進文化を手に入れた古代ギリシアが、部族社会特有の社会的課題と社会変化に伴うその変動において、心魂論すなわち心理学を構築したと考えられます。

古代ギリシアのポリスは、地中海の真ん中に位置する半島に成立しました。多数の島嶼が散らばるエーゲ海を挟んで、東隣がアナトリア半島。その先にエジプトとメソポタミアがあり、古代先進文明と近接していました。そして、海洋貿易ができて、しかも、古代文明のあるオリエントと、西のイタリア、シチリア、イベリアとの交易の中継地という、恵まれた位置に古代ギリシアはありました。他方、バルカンとペロポネソスの両半島は山勝ちで、隣接する大国から攻め込まれにくい、小さな平野や盆地が点在していて、古代ギリシアは部族社会のままでした。土地が狭くしかも痩せており、家畜の放牧に麦とオリーブなどの農耕で人口増を支え続けるには、生産性が十分な所ではなかったのです。それで、古代ギリシアの各ポリスは、それぞれ海洋進出しました。最初は略奪と移民です。次に、さらってきた女や子どもを売買する奴隷貿易です。古代文明の周辺の部族は、売り物がないので、まず奴隷貿易をして富を得えます。しばらくして、技術や文化を古代先進文明から導入すると、略奪や奴隷貿易よりもリスクの低いことをします。壺を作って輸出をしたり、傭兵団を出したりします。移民も、かなり早くから行われていました。アナトリア半島のイオニアなどにあったポリスを、「植民地」と言う場合がありますが、植民地ではなくて、移民団あるいは移民地です。しばらくの間、移民はくじ引きで決めていました。バシレウスの息子であろうと、誰であろうと、粗末

な船で追い出すように送り出して、戻ってきたら、みんなで石を投げて追い返す。そういう状況の部族社会が、古代ギリシアではしばらく残っていました。

また、ポリスは「都市国家」や「小国家」と訳されますが、地縁・血縁による集団です。古代ギリシアでは、「無頭地域集団」から「首長制領邦」へと向かう間の、連続的変異のある血縁・地縁集団が存在していたと考えられます。人口は、全盛期のアテナイでも20万から30万。数千人というポリスもありました。居住地には、通常、中心に住居が密集する地区があり、その周辺に農耕地がありました。中心からかなり離れた場所に住む者もいました。ポリスは島嶼や盆地や平野に点在しており、界間は海や山野で隔てられていました。明確な境界線はありません。ポリス内には、血縁、地縁、戦友などの強固な人的ネットワークが多重にありました。それゆえ、古代の専制的先進文明や現代の先進国にない文化として、部族社会特有の豊かな言語交換がありました。部族社会と言うと、言葉が単純だとか差別的なことを考えがちです。しかし、それは全く事実無根で、東洋専制主義から発展させた、明治期以後の日本社会に比べれば、どの部族社会も、はるかに言語交換が豊かな社会であると言えます。

社会構造をABC3種類に大別して、それぞれが成立する生態学的要因について、レジュメ2ページに枠で括っておきました。Aは極地や高地や密林で、乳児死亡率が高く、食糧が乏しく食事が2、3日に1度というような所で成立する社会です。この社会は平等社会に比較的近く、協同しないと生きていけないために、そうなります。Cの温暖で肥沃な大河流域の平原では、生産性の高い灌漑農業が可能で、灌漑設備の建設と利用に大規模な動員とその一元管理を必要とするために、官僚を有する中央集権国家ができます。これは、歴史学者カール・ウィットフォーゲルの東洋的専制論で言われていることです。それに対して、Bは、AとCの間の大多数の地域における社会で、ある程度食べ物があり、時間と労働に少し余地がある。マルクス・エンゲルスの説に基づけば、生産様式の革新によっていわゆる「余剰生産」が生じるとされますが、部族社会では、必要のないのに増産するなど、そんな無駄なことはしません。男たちは、時間と労力を、生殖機会を高める

ための地位争いに回します。そうすると、集団内にトップの男、 α (アルファ) オスが出現します。そこから、首長制社会へと展開すると考えられます。ただし、そのような社会は、暴力によって維持されている社会ではありません。特に男同士の暴力はリスクが高いので、人類の場合、集団内では言語を駆使した様々な交渉が行われます。

文化人類学者ロバート・ローウィ (Lowie) によれば、部族社会の族長の共通特性は、まず、「集団内の緊張を緩和する」ことです。次に、「物財を出し惜しみせず、集団に提供する」ことです。族長による惜しみない物財の提供や饗宴は、北米西海岸のポトラッチが有名ですが、多くの部族社会で見られることです。そして、「講話や演説がうまい」ということです。たとえば、北米先住民やアイヌ民族などの族長による巧みな演説が、記録に残っています。どれも感銘を受ける名演説ばかりです。古代ギリシアのアテナイのアルコン、すなわち執政官として名高いソロンやペリクレスも詩人でした。族長がなぜ弁舌巧みかと言うと、部族社会が、徹底的な交渉によって維持される社会だからです。狩猟採集社会では、集団内の成員相互による、様々な働きかけが活発になされることによって、富の独占が防がれ、公平な分配が達成されています。これは文化人類学者の市川光雄が、フィールドワークによって明らかにしています。またたとえば、アフリカの部族社会では、規則や法に対する「交渉可能性」が社会の基盤であり、たとえ法律があっても、法による一元的秩序はありません。これはアフリカの政治経済学者サラ・ベリー (Berry) が報告しています。部族社会では、たとえ近代的な法律があっても、徹底的に交渉するのです。

暴力によらない影響力の行使は、部族社会だけではなく、霊長類社会にも見られます。比較心理学者フランス・ドゥ・ヴァールは、動物園のチンパンジー集団を研究して、地位争いには、暴力だけでなく、敵対する他個体との協働や、多くの他個体からの支持などが用いられることを示しました。たとえば、暴力で拮抗するオス同士が二頭現われて膠着状態となったとき、先代の α オスの配偶者であった、年老いたメスがトップに据えられたのです。そし

て、トップ争いをしている二頭のオス同士が喧嘩すると、そのメスが割って入って調停するのです。また、比較心理学者サラ・ブロスマン (Brosnan) によれば、フトオマキザルは、集団内におけるある程度の「不平等」は受け入れますが、「不公平」は拒否します。不平等とは体力差や能力差です。これらは、生まれ育ちで出てしまうので受け入れます。ただし、体力や能力による仕事に見合った報酬をもらえない場合、また、同じ労力の作業をして、同じ報酬にならない場合、つまり、それらが不公平ということで、それらには我慢できない。実験によって作り出された不公平事態において、フトオマキザルは渡される餌を拒否し、時には餌を支給する研究者に投げつけて返すこともしました。さらには、不公平に良い餌を貰っている他個体には、威嚇もしました。霊長類の小集団の α オスは、単に暴力で支配するのではなく、利己性を律して、他の成員全てに公平に応じることで集団を維持し、結果的に、繁殖順位がトップである自身の適応度を上げると考えられます。 α オスの利己的または不公平な振る舞いが集団内で認知されると、集団的な離反が生じます。 α オスは、そうならないように振る舞います。そのような霊長類研究から、所得格差が拡大する現代において、ニューリッチに、徴税や寄付などで社会に富を還元してもらうために、利己主義や不公平所得に対する、「恥」意識を高めてはどうか、という議論まで出てきています。

人間の部族社会では、さらに様々な方法や手段によって、格差の拡大を防ぎます。南米アマゾン流域に住む、トゥピーグアラニ語族として括られる部族を研究した、文化人類学者ピエール・クラストルの『国家に抗する社会』によれば、まず、部族社会では、様々な機会に、族長から物財を提供させます。族長やシャーマンが権力を強める場合、集団で分派することまでします。それまでには、言語交換、すなわち、言説や話を応酬することを部族内でします。ストーリー仕立てで行為や物事のあり方を説く話を、「話説」と呼んでおきますが、族長は、祖先からの生き方によって平和に暮らすことについての話説を、聞き手の人々を楽しませつつ、朝夕に講話します。講話の上手さが、族長の資格です。他方、男たちは、戦士であり狩人であるのですが、たとえば

夜に火の不寝番をしながら、それぞれ焚火の前で、自己アピールや自己高揚のための勇ましい即興歌を個々別々に歌います。「オレは優れた狩人だ」「オレは強い」などと歌うのです。女たちは、共同作業をしながら、生活の辛さを哀調込めて声を合わせて歌います。さらに、部族集団の中で共有されている話説があり、クラストルはそれを「神話」と呼んでいますが、神のような存在は話に出てきません。行為やしきたりや動植物などの由来についての話説です。集団内で共有される話には、笑い話もあります。笑い話には、たとえば、集団から恐れられているはずのシャーマンが、滑稽な愚行を繰り返すというような話があります。

ここで考えられるのは、「統治術としての物語」と「反統治術としての物語」、二種類の物語があるということです。族長が行う話説は、聞き手が考えさせられて賞罰のルールを見出し、それに従う行動をするように語られています。心理学では、「rule-governed 行動」が、他者の行動を観察したり出来事を体験したりすることによっても、話を聞くことによっても、獲得されることが示されています。それに対して、観察や話からルールを自ら見出すのではなく、他者から命令されたり規則を作られたりすると、心理的リアクタンス、心理的反発が生じることも示されています。族長が語る話を面白可笑しく聞いているうちに、心理的リアクタンスなしに、賞罰ルールが聞き手において内面化すなわち主観化される。そして、聞き手がそのルールに従うようになる。ミシェル・フーコーは『監獄の誕生』において、人権思想が確立しつつあった近代に、「sujet」の主体と服従という二重の意味通り、個人を犯罪などの行為の責任主体とする他方で服従させること、「assujettissement」のために、人間科学が「人間」を客体すなわち対象として、身体罰に代わる種々の処罰方法を考案したことを指摘しました。それに対して、『性の歴史』では、古代ギリシア末期において、人々が倫理を自ら主観化することによって服従してしまうようになったことを論じました。しかし、そのようなことは、それよりも以前に、そしてより広範に、族長による説話や物語によって、巧みになされてきたのです。言ってみれば、主題化＝主観化＝服従化です。ジョン・オースティンの言行行為論で

言えば、発話において意味を構成する、発話内行為によって生じる「発話の力」とも、言えるでしょう。ただし、同時に、部族社会では、族長のそのような物語に対して、秩序を破壊する猛烈な戦士の物語や、権威を貶める笑い話で対抗する言語交換がなされているのです。

以上を踏まえて、話を古代ギリシアに戻します。レジュメの4ページ。ポリス運営は、通常において「君主制」または「民主制」であったと言われますが、いわば「公民会制」です。古代ギリシアのポリスの「民会」は、部族社会における族長と戦士たちによる軍議などの、集会の延長線上にあるのです。未成年や女たちや私民、隷僕や奴隷、自由民や移住民は、民会に出席することは許されませんでした。民会に参加する公民権を有する男は、ポリス内の出身で成人していて、自前で武具装具一式を揃えて戦闘に参加できる者と戦闘にかつて参加した者、つまり、現役戦士と退役戦士でなければなりません。全盛期のアテナイでも3万人から5万人程度と考えられます。民会で討論されるのは、主に他ポリスとの戦闘や交渉、外交です。また、ポリス内での相続や利権争い、公民権の承認、訴訟による裁判になります。ちなみに、警察権力はありませんでした。裁判としては、いわゆる「ソクラテス裁判」が有名で、哲学そして心理学の成立に関連しています。民会の改革・拡大においてソクラテスが危険視されたために裁判されたとする、橋場弦の説が、妥当であり重要なのですが、時間が無いのでここでは割愛します。

レジュメの4-5に進みます。クラストルの『暴力の考古学』によれば、部族社会では、族長が自集団すなわち内集団の集団凝集性を高めて、自身の地位を安定させるために、他集団すなわち外集団との戦闘を、男たちに絶えず持ちかけます。部族社会で戦闘が絶えないのは、そのためです。「族長の地位を安定させるために、族長が意図的に戦闘を仕掛けるので、部族社会において戦闘は絶えることがない。」フィールドワークに基づくクラストルの結論です。戦争に関する仮説には、ポップズの言う人間の自然状態における利己主義説や、マルクス主義的な資源欠乏説や、レヴィ・ストロースの交差いとこ婚失敗説があるのですが、クラストルのフィールドワーク

では、族長が持ちかけて戦闘が生じる場合ばかりだったと報告しています。古代ギリシアもそのような部族社会でしたので、戦闘が絶えず行われていました。族長と男たちとの集会はまた、地位や富や生殖機会の獲得を争う場です。そして、そのような社会において、言語交換が徹底的になされていたのです。それに比べて、現代日本は言語交換がとても乏しいと言えるでしょう。考えられる理由は、レジュメに枠で括って書いておきました。

レジュメの5に進みます。古代ギリシアにおける、神話から哲学へと変容する歴史、そして、心理学の社会的構成という問題に入ります。神話については、進化心理学において盛んに議論されており、多くは、神観念や物語行動が進化によって獲得されたとする説です。しかし、それらは、フィールド言語学者ダニエル・エヴェレットが報告した、アマゾンの少数民族ピダハンの文化によって否定されます。ピダハン文化には、神話だけでなく、フィクションすらないのです。それどころか、発話文に「embedding」すなわち埋め込み構造がありません。再帰や節がなく、相対時制もない。間接話法がないので、当然、神の言葉を伝える神話を語ることはできません。文中に節構造を算出するための文法は、人類に生得的であるという、ノーム・チョムスキーの初期からの説を、ピダハン文化の存在は否定します。むしろ、神話を語るために、節構造や相対時制が工夫されるようになったとも考えられます。ピダハンの言語については異論もありますが、重要なことは、フィクションや物語、創世神話がないことです。神観念や創世神話を持たない民族は多数あります。そこから、フロイトの神観念の父性投影説や、ユングの元型論だけでなく、進化心理学における神観念の進化説・生得説も否定できます。

創世神話に関連して、神話学者ミヒャエル・ヴィツェル(Witzel)の説も、否定されるでしょう。彼は、創世神話のないゴンドワナ神話群と創世神話のあるローラシア神話群の2群に大別して、ゴンドワナ神話群は、七万五千年前あたりに、人類がアフリカから出てきたときに既にあったとしています。それに対して、ローラシア神話群は、四万年ほど前の、インド洋のアジア沿岸を起源としていると主張してい

ます。 Gondwana 神話群は、確かに、人類が無頭地域集団だけだった頃から、生産・再生産されてきたと考えられます。しかし、ローラシア神話群が、四万年前まで遡るとする説は、支持できません。創世神話は、族長が世襲化され、さらに、大きな部族集団で有力な部族長が出現し、その権威づけのために創成されたと考えられます。ウィットフォークルによれば、大規模な灌漑農業がなければ、そのような中央集権的巨大大権力は出現しません。四万年前に、そのような大規模灌漑農業があったという証拠はいまのところありません。ただし、古代ギリシアには大規模な灌漑農業はありませんでしたが、創世神話はありました。これは、エジプトやメソポタミアなどの古代先進文明から導入されたか、もしくは、ペルシアなどの強大な他民族からの侵略への備えなど、多数のポリスの統合もしくはそれらの大同団結が必要であったために創作されたか、いずれかだと考えられます。

レジュメの6ページに進みます。古代ギリシアの創世神話は、紀元前8世紀のヘシオドス神謡に既に存在しています。古代先進文明から伝播したとも考えられますが、いずれいせよ、イオニアからギリシア本土へ引き上げてきたヘシオドスを作者として、創世神話がギリシア全土へと広められたのは、当時の古代ギリシア社会の情勢があったからだと考えられます。まず、それよりも2、3世紀以前に、地中海交易によって、文化人類学者マーシャル・サーリンズがメラネシアの研究で報告している、「ビッグマン」と同様の存在が、古代ギリシアに出現したと考えられます。「英雄廟」と呼ばれる、紀元前11世紀の遺跡がありますが、石造りではなく、木造の巨大建築です。横幅50mほどありますが、呼び名のとおり、内部に墓室があります。同時期の遺跡として、同様のものがいくつか見つかっています。比較的造りやすい木造の、一代限りの建物と言えます。これは、地中海貿易によって急速に富を得た、ビッグマン、要するに成金、その館だと私は考えます。古代ギリシアでは「テュランノス」と言っています。「テュランノス」は「僭主」と訳されますが、「支配する者」という意味です。他方、「王」と訳される「バシレウス」は、支配する者ではないということです。

ポリスを支配しようとするテュランノス、すなわちビッグマンが出現すると、それまでの族長と戦士たちによる、旧来の共和的秩序が崩壊する危機が生じます。そのとき、シャーマンでもあった族長が、ビッグマンに対抗して、神話と祭祀によって、自身の権威を上げていったと考えられます。サーリンズは、メラネシアのビッグマンと、ポリネシアの族長を対比的に紹介しています。「ポリネシアの族長は、世襲化されていて威厳があり、祭祀を取り仕切り、権威によって民衆から支持を得ている。それに対して、メラネシアのビッグマンは、品格がなく、お金をばらまいて支持を得ている」というように報告しています。紀元前11世紀から9世紀あたりの古代ギリシアにおいても、テュランノスすなわちビッグマンに対抗して、シャーマンであり族長である、バシレウスの権威づけと、世襲化と血筋の正統化が、神話によって行われていったと考えられます。そのなかで、4氏族の複合体から急速に発展し巨大化したアテナイは、一人のバシレウスではなく、複数のアルコン、執政官を各氏族から選出して、短期間で交代させる制度を導入したと、考えられます。ちなみに、南米のトゥピーグアラニ語族とされる部族集団では、族長「カシケ」は世襲されていません。女のカシケもいます。

バシレウスの権威づけと世襲化に向かうプロセスにおいて、一代で成り上がったテュランノスに対抗して、代々の先祖が権威として用いられ、さらに先祖にバシレウスの地位を与えた人間を超越する「神」という存在が、創作、または、エジプトなどの古代先進文明から導入されたと考えられます。紀元前8世紀のホメロスの『イリアス』では、登場人物の家系がいちいち紹介されます。そして、「ゼウスが某かの娘と交わって生まれた子が、先祖である」というような語りが、数多くあります。シャーマンであるバシレウス自身が「詩人」として、あるいは、バシレウスの囲う芸能者である「詩人」が、神とバシレウスの先祖との関わりを語って、バシレウスを権威づけたと考えられます。そして、時を経て、シャーマンから、神官、語り部、芸能者、詩人、吟遊詩人、そして、ソピステスが、形成されていったと考えられます。国文学者の古橋信孝は、吉本隆明の共同幻想論からヒントを得て、天皇崇拜という共同幻想を形

成する者として、万葉歌人を捉えています。万葉歌人は宮廷に仕える歌人であって、天皇が常人を超えた存在であることを宣伝するために、方々を回った吟遊詩人だったと主張しています。古代ギリシアの詩人、吟遊詩人、芸能者も同様であったと言えるでしょう。

言語文化における職能者や芸能者が現われると、シャーマンであるバシレウスと、戦士たちの間での、言語交換がさらに高度になり、豊かになり、複雑になっていきます。ホメロス叙事詩、ヘシオドス神謡、そして、ギリシア悲劇・喜劇が形成されていきました。ギリシア悲劇は、基本的に、神々への賛美と英雄の悲劇的な死を語ります。人間の限界を示すとも言われますが、要は、「英雄」によって象徴される戦士たちに向かって、「戦士は所詮人間であり、神々を凌ぐことはできず、神々が与える宿命から逃れられない」と言っているのです。ギリシア悲劇は、元々、シャーマンであり族長である、バシレウスが語った、または、語らせた話説と考えられます。古代ギリシアにおいて、「詩人」とは、詩によって悲劇を語る者です。それに対して、ギリシア喜劇は、有力者の権威を貶める語りです。古代ギリシアでは、悲劇も喜劇も、ポリスを挙げての祭典において上演されました。祭典とは、公民だけでなく、女たちや子ども、それ以外の非公民に対して、公民すなわち族長と戦士たちが、言語交換を繰り広げる場だったのです。

こうしてバシレウスと戦士たちの権威が高められていくと、文化人類学者モーリス・ゴドリエの言う「grands hommes」、グレイトマンが出現すると考えられます。グレイトマンは、神が先祖に与えたと言われる神器や王笏のような聖具や知恵などに関して世襲されている地位です。知恵とは、たとえば農耕技術や作物、工芸技術です。また、グレイトマンには、当代において偉大な功績のある者も入ります。つまり、グレイトマンは、世襲的なシャーマンで族長である者と、当代の大戦士です。グレイトマンの存在は、ビッグマンが贈与と反対贈与によって権力を獲得することを防ぎます。神々や先祖は、皆が幸せに暮らすための大地と文化を与えてくれたとされます。それに対して人間たちは、マルセル・モースの言う、贈与への「第四の義務」を負います。すなわち、日々祈りと供物を捧げ、重要な局面において供犠と

して命を捧げることです。その義務はなくなることはありません。グレイトマンはその義務を取り仕切り、さらには、その義務を果たされる者となります。ただし、ビッグマンに対抗してグレイトマンが出現するという、ここでの話は、ゴドリエの説とは異なりますし、古代ギリシアでは、オデュセウスやヘラクレスなど、言語交換における象徴としてもグレイトマンが存在していました。

レジュメ7ページに進みます。ホメロスとヘシオドスの神話を考えます。彼らには共通点があつて、どちらもギリシア本土からエーゲ海を挟んで東向いの、アナトリア半島イオニアの人です。ヘシオドスがレイボス島で、ホメロスはキオスまたはスミナリエなど、諸説有のですが、いずれにせよイオニアです。さらに、アナクシマンドロスも、ピュタゴラスも、ヘラクレイトスも、紀元前8世紀から5世紀の弁論者たちはみなと言ってよいほど、イオニアに関連しています。その理由には、当時のアナトリア半島におけるフリギア、キンメリア、メディア、リディアの興亡、そして、ペルシアの興隆と勢力拡大による脅威があると考えられます。イオニアには、ギリシアからの多数の移民ポリスが居住していて、それらが圧迫され支配される危機に晒されていました。イオニアの移民ポリスは、本土の出身ポリスに度々支援や救援を求めています。そして、イオニアの移民ポリス全体を支援もしくは救援してもらうための最初の話説が、ホメロス叙事詩とヘシオドス神謡として、本土の全ポリスに発せられたのだと考えられます。

ホメロスの叙事詩『イリアス』は、要するに、ギリシア本土の全ポリスの連合軍が、アナトリア半島へ遠征していることを語っています。登場するアガ멤ノンとは、「バシレウスのバシレウス」です。当時の古代ギリシアは、統一されておらず、そのようなバシレウスはいません。オデュセウスは、小さなポリスのバシレウスですが、知将であり、『オデュッセイア』ではシャーマンとして語られます。たとえば、冥界に赴いて儀式をして、死者に語らせています。そして、アキレウスは英雄であり、戦士の象徴です。『イリアス』の冒頭、戦士たちの象徴であるアキレウスがトロイアとの戦闘で奴隷にした巫女を、バシレウスたちの代表であるアガ멤ノンが横取りしたこと

による対立が語られます。それによって、アキレウスは戦列を離れ、他のバシレウスも戦士も、アガ멤ノンから離反して連合軍がバラバラになります。それに対して、オデュセウスが、様々なポリスの陣営を一つひとつ回って説得します。「わがアカイア軍にあっては」、これはギリシア軍のことです。「みなが殿様面をしているわけにはいかない。統率者の数の多いのは、確なことにはならん。統率者は一人でよい……ゼウスが民をすべよ、と笏と王権を授け給うた王が、一人あればよいのだ。」(松平千秋訳、岩波文庫)と、全陣営を回って説得します。つまり、バラバラになってはいけないから、とりあえず、アガ멤ノン一人に統率を任せようというわけです。オデュセウスの説得で、ギリシア軍は再びまとまりますが、アキレウスがいないためトロイア軍に対して苦戦が続きます。そして、親友パトロクロスが殺されたことに憤慨して、アキレウスがついに再び参戦し、トロイアの大將ヘクトルを討ち取って、ギリシア連合軍は重要な勝利を手にします。

古代ギリシア語で、「アガ멤ノン」は「ねたまれる者」を、「オデュセウス」は「憎まれる者」を意味しています。どちらも、バシレウスとは、人からねたまれたり、憎まれたりするという戒めです。ちなみに、「ホメロス」は「囲われ者」です。方々のバシレウスに歓待され囲われる芸能者とも、考えることができます。8ページに、『イリアス』での族長と戦士の言語交換を書いておきました。いずれにせよ、重要なことは、『イリアス』が、全ギリシア連合軍による、アナトリア半島への遠征を語っていることです。ホメロスの時代、アナトリア半島のギリシア移民ポリスは、強大な他民族の脅威にさらされていました。イオニアの吟遊詩人であるホメロスは、全ギリシアを統一するバシレウスによる、アナトリア半島遠征に向けた備えを訴えていると考えることができます。古代ギリシア統一の訴えは、先ほどのオデュセウスの言葉に端的に表されています。

『オデュセイア』は、族長であるバシレウスが遠征で不在中の、故郷にいる妻や息子、そして、バシレウスの地位の篡奪を目論む者たち、非公民、隷僕や奴隷に向けて、語られていると考えられます。族長オデュセウスは、様々な危険や苦難を、知恵と勇気で乗り越えて、帰還のための旅をします。その間、

妻のペネロペイアは貞節を守り通し、息子のテレマコスには母を支えて凛々しく成長します。そして、オデュセウスは帰還して、地位篡奪を目論んだ者たちを一瞬にして皆殺にし、息子テレマコスは、裏切った奴隷たちを文字通り十把一絡げに惨殺します。この物語は、留守番をする全ポリス民を威嚇しているのです。アナトリア半島への遠征において、本土に残る者たちに警告しているのです。

ヘシオドスの『神統記』と『仕事と日』は、天地創造からゼウスによる神々の統率、そして、人間の由来と日々の生活のしきたり、つまり、倫理についての話説です。『神統記』において、ゼウスを神々の頂点とする統一神話が語られています。様々な神を奉じる、諸ポリスを統合する神話ということができます。これは同時代のホメロスの『イリアス』と同様、古代ギリシア統一の備えをしていると言えるでしょう。統合神話の叙述の構成は、ポリスごとにバラバラに奉じられている、神々を超越する視点を示すために、世界の成り立ちと神々の誕生が語られます。そして、人間の由来が語られて、最後に習慣、エトスすなわち倫理の由来が語られます。世界観、人間観、倫理観を順に語る流れです。これは西洋の学術体系すなわち西洋哲学の論述構成の基本形です。

9ページです。紀元前6世紀、アナクシマンドロスが宇宙の生成を物質的に論じたのですが、荒川紘や瀬戸一夫が指摘している通り、ヘシオドスの『神統記』を物質的に言い換えただけです。それは、おそらく、ヘシオドス神話、さらには各ポリスが有する個別神話を全てキャンセルし、旧来の権威を完全にキャンセルするためです。たとえば、古代エジプトでは、アメンホテプ4世が太陽神アメンラーを唯一神として奉じ、古代ローマでは、コンスタンティヌス帝が唯一神を信仰するキリスト教を国教化して、有力な諸氏族の旧来の神々をキャンセルし、一元的な権威によって権力を掌握しようとしてしました。日本の古代における国家仏教の導入や、天武による太陽信仰も同様の試みでしょう。アナクシマンドロスの唯物論的な宇宙生成論は、ヘシオドスがゼウスを最高神としたのにもかかわらず、ペルシアの脅威を前にしても、それぞれの神を奉じてまとまらない、古代ギリシアの状況をキャンセルするためだったと

考えられます。柄谷行人は、「イソノミア」すなわち言論の自由が哲学を発生させたと論じ、それが自然学であったことを説明するために、「イオニアは、ギリシア本土から遠く離れたイソノミアの地だったので、権力や権威から自由で、平和で、物財も騒動も何もないため、生活の基盤であり目の前にあって、日々接する自然物に関心を持った」というような、彼らしくない呑気なことを言っていますが、当時のイオニア、アナクシマンドロスの晩年には、アケメネス朝ペルシアの勃興に伴って、強い危機意識があったはずです。

アナクシマンドロスによる、旧来権威のキャンセルに対して、言語交換によって対抗したのが、ピュタゴラスです。ピュタゴラスはバシレウスではなかったようですが、シャーマンであり、人文学の祖ということが出来ます。そして、そのピュタゴラスに言語交換によってさらに対抗したのが、主として自然と心魂について述べたヘラクレイトスです。ヘラクレイトスは、イオニアの全移民ポリスが徹底抗戦を構える中、唯一ペルシアの脅迫に屈して裏切った、エベソスのバシレウスの長男でした。長男ながら、バシレウスにはならなかったと言われます。ピュタゴラスとヘラクレイトス、そして、それ以後の言語交換がどのようであったかは、レジュメの10ページに書いておきました。心理学の登場までいかなかったのですが、とりあえずここで話を切ります。

尾山：ありがとうございます。それではちょっと間を置きます。みなさん、ご休憩下さい。

(休 憩)

田中：最後のところを読んでもらうのは、どれくらいかかりますか。やはり、一応最後のところは、やったほうがよいでしょう。

天ヶ瀬：すみません。歯切れが悪いので、時間を延長して続けさせていただきます。10ページに、族長系の言説と戦士系の言説に分けて、古代ギリシアにおける言語交換を、年代順に書いておきました。そうしたなか、紀元前5世紀、アテナイにおいて、悲劇、喜劇、ソピステスの弁論など、豊かな言語交換がなされるようになりました。先ほど言いましたように、悲劇は族長系の話説で、神に対する人間の限界を示す物語です。それに対して、喜劇は有力者の権威を貶める語りです。ソピステスは、当初、主に自然を論じ

るかたちをとって、何かを訴える人でした。エムペドクレスは、まさにそのような人です。ペルシア戦役に勝利して最有力ポリスとなったアテナイに最初に訪れたソピステス、アナクサゴラスも自然学の人です。アテナイを訪れず、地方のポリスに留まっていたピュタゴラス派は、自然学派というよりも、むしろ人文学派と言ってよいでしょう。そういうような系統・系譜があって、それらが言語交換をしていたと言えます。

その流れで、ソピステスの権威をキャンセルすべく、プラトンは「ピロソボス」、哲学者を名乗ります。その師であるソクラテスによる、無知の知の訴えも、まさにそれをしています。レジュメ12ページ中ほどです。プラトンの『ポリテΙΑ』、「国家」と訳されますが、「ポリテΙΑ」の意味は「ポリス公民の資質と権限」です。テュランノスの否定、物財とポリス内暴力による権力の否定です。そのために、物欲の根源である肉体に対して、精神を重視します。世襲による権威も、否定します。徳、すなわち、心魂における優れた資質を重視します。そして、個々人における優勢な徳によるポリス運営への参加、いわば、心理的適性による統治、社会分業を主張します。さらに、徳を育て伸ばす教育を、発達心理学的な教育方法と教育課程によって示しています。プラトンは、生きることに於いて、物質・肉体よりも、心魂、プシュケのあり方、すなわち、徳が大切で、ポリスを維持・運営するためには、知を尊重し求める理性の徳が重要だとします。

それを引き継いだのが、アリストテレスです。プラトンと対立的に言われることが多いのですが、実際には、プラトンが行った議論を、ピロソボスとして自然学も取り入れて精緻に示そうとしたと言えます。「心」「プシュケ」とは何であり、プシュケがどのようなときに健康で幸福なのか、つまり、善なのかを示します。善とは、善きこと、幸福です。プシュケにとって善きことが、大切だというわけです。それは結局、倫理的に生きることだと、アリストテレスは証明しようとしたのです。自然や生物を論じ、『心魂について』と、それに続く『ニコマコス倫理学』において、現代も引き継がれている様々な心理学説を記しました。そして、それらを最終的に『政治学』につなげていくのです。プラトンが論じた徳に基づ

く統治論に対して、アリストテレスは、心理学的な基礎づけを行ったと言えるでしょう。正義において生きること、それが精神的な幸福をもたらす、ゆえにそれを、生き方の習慣、倫理とせよと言ったのです。このような言語交換は、ある意味、部族社会内での見栄の切り方ですが、そうやって互いに倫理に高めていくことをしていったのです。本当の幸福、精神的幸福とは、倫理に従って生きることによって実現される。それを示すために、倫理と政治の基礎としての、心理学が確立したのです。

ただし、古代ギリシアは、マケドニアのバシレウス、フィリッポスとその息子アレクサンドロスによって統一されます。アレクサンドロスはアリストテレスの生徒でしたが、プラトンの考える理想には至っておらず、それどころか、マケドニアは古代ギリシアのポリス間同盟外で、バシレウスが一夫多妻制をとる異質な部族集団でした。そのバシレウスを世襲する者が、スパルタを除く古代ギリシアの統一者になった。しかも、その後大王位は家臣たちに篡奪され、分割され、世襲化されます。エジプトなどの古代先進文明の統治機構を用いた、巨大な統治機構が出現し、人々は統治者側と被統治者側に二分されます。古代ギリシアのほとんどのポリスは、公民・非公民にかかわらず、被統治者となりました。それゆえ、その後の哲学は、統治者に平静さや禁欲を説く学派の哲学と、被統治者に心魂の自由や平穏を説く学派の哲学になって行きました。

近代では、カトリックとプロテスタントの宗派対立を口実とした、王侯貴族の利権や覇権を巡る内乱や戦争が絶えない時期に、キリスト教権威と統治を分離するために心理学が行われました。デカルトやジョン・ロックなどです。彼らは、宗教権威によらずに、プラトンまたはアリストテレスの哲学に倣って、支配層の倫理や政治の基礎として心理学を行ったのでした。以後、議会制統治とその法を基礎づけるために心理学がなされましたが、19世紀、ドイツ連邦では、市民社会あるいは政治を論じるための学問間の覇権争い、学問間闘争が生じました。その中で、古代ギリシア以来、そして、17、18世紀を通じて、倫理や統治論の根幹とされていた心理学が批判されました。それを決定づけたのはカントです。13ページに書いておきました。カント以前の英仏の哲

学者たちは、古代ギリシアに倣って、心理学によって倫理や統治を説いていました。その頂点に立つのがヒュームとアダム・スミスです。キリスト教に代わって、近代社会の道徳そして法を考えるために、ヒュームは人間本性を論じ、それに基づいてスミスは、感情による道徳の基礎づけを行いました。ヒュームとスミスは、同時に、中産階級が社会を担うために啓蒙を行い、また、産業化のために政治経済学を確立しました。そして、ヒュームの人間本性論と観念連合説を基に、統治術を冷徹に考えたのが、ベンサム功利主義になります。功利主義の基本は「観念連合経験」すなわち「条件づけ」によって、個人の快楽原理を社会の最大幸福原理へと、賞罰によって連合させるという発想です。そのために、功利計算すなわち様々な快と苦の分類と強度比較をします。まさに心理学です。それによって、近代的統治の支柱である刑法の基礎が確立しました。

その流れに対してカントが批判を加えたのです。ドイツ連邦は、17世紀の「三十年戦争」以来、多数の領邦に分裂して不安定な状態に長くありました。しかも、カトリック勢力とプロテスタント勢力が完全に拮抗して、宗派对立の残る場所でした。ブリテンの産業革命を目の当たりにして、ドイツ連邦でも近代化・産業化が急がれましたが、キリスト教道徳を破棄して、近代社会の道徳そして法を確立しようとしたヒュームとスミスなどの思想は、ドイツ連邦においては危険であり、批判する必要があったのです。そこで、カントがとった方法は、「純粋理性」と「実践理性」の分離です。現象界と叡智界の分離、そして、感性論と道徳論を分離します。感性論に基づく道徳論は、アリストテレスが行い、近代ではアダム・スミスが確立したのですが、それらを分離したのです。カントは、道徳に対する経験論心理学すなわち感性論の限界を言います。経験論心理学では、道徳を論じることはできないという結論に、カントは持って行きます。そして、カントの後に現れたのが、道徳そして法の観念の形成を、社会の展開すなわち社会史に求める観念論です。観念論から、ドイツ連邦における反心理学主義、系譜学、解釈学、歴史学、社会学が誕生していきます。ここに、統治と法を巡る学問間闘争が生じます。フランスは英独と違って、革命政権と啓蒙の関係や王党派と共和派の

関係など、かなり込み入ったからみがあるのですが、いずれにせよ、心理学主義を批判する動きが、オーギュスト・コントなどによって、19世紀半ばには形成されていきました。

ブリテンでは、ヒュームの人間本性論と観念連合説以後、スミスの道徳感情論、功利主義、キリスト教批判のための生命科学与生物進化思想、功利主義に反発するロマン主義、あるいは、質的功利主義などの市民サークルにおいて、心理学は経験科学化されていきました。ドイツ連邦では、啓蒙期に半ば国策を担った大学において、学問間闘争や心理学主義批判を経て心理学は科学化し、大学に実験室が設置され、事実学となっていく。プラトンに先駆的な例があるのですが、心理学を教育に用いる動きは、17世紀からあって、18世紀後半には既に、教育方法論に心理学が援用されました。19世紀末には、それが実験化され技術論化します。さらには、フロイトの登場によって、心理学は精神医学のための技術論にも用いられます。また、産業への応用も、考えられるようになりました。そして、「長い過去はあるが、心理学の歴史は短い」とする、影響力の強い実験心理学の教科書が、20世紀初頭にドイツ連邦で出版されました。新興国のアメリカ合衆国では、「過去」を一切捨てる態度が、科学主義の名の下、心理学においてより徹底的にとられるようになりました。現在、それが問題として浮上しています。そして、それは人文学全体にも言えることだ、というのが、今日の私の話になります。

尾山：ありがとうございました。では、今からは田中先生と西谷地先生それぞれコメントを言っていて、その後、三人の先生でディスカッションしていただきます。

田中：コメントというには若干ずれているところもあるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

大変浩瀚なご報告の後で恐縮ですが、非常に大雑把な見取り図を提示して、議論の共通項を作っておきたいと思います。先ほど、神話的なものから人文学が立ち上がっていく、そのルートを非常にダイナミックに展開されていたと思うのですが、一方、戦後には戦後の神話の否定の仕方があったわけですね。ひとつの典型としていえば、「虚構論」、Representationの概念に帰着させることだったと思

うんです。人文学の枠内での、interdisciplinaryな展開という意味で、2000年代以降何があったかといえば、表象文化論的なものが立ち上がるということがあった。1987年、東京大学の教養学部に表象文化論分科が設置されていますが、それから20年たって2006年に表象文化論学会ができます。それが戦後の表象文化論的なものの到達点であり、終わりだったと思うわけですね。

虚構ないし作為的なものとしての人文学、天ヶ瀬先生の言い方ではカント的な二元論の中で、実在的なものに対立する虚構の側に人文学はあると。もちろん、なかでも歴史学は実態も扱っているわけですが、そこはカッコに入れないと学際的な集まりもできませんから、実態の部分はカッコに入れて、我々人文学者がある種の学際性を発揮するという形をとってきた。そのカッコが「表象」だったわけです。レジメに五つくらい例をあげてますけれども、ホブズボームが「伝統は作られたものだ」と言い、アンダーソンが「国民国家は想像の産物だ」と言い、ヘイドン・ホワイトが「歴史は歴史家の物語だ」と言い、あるいはサイドが「オリエントなるものは西洋人が作り出した虚構だ」と言い、あるいは、「作家の語る内面や風景というものは近代社会が作り出したものだ」と言う柄谷行人がいて、そういった表象論が盛んにされていたと思います。

原点をたどると、丸山真男にぶつかります。荻生徂徠が「道」を聖人の作為する道だ、といった、これを高く評価したわけです。この評価がそのまま戦前の天皇制の批判につながります。なぜなら戦前のひとつとは天皇を現人神として、作為的なものとは認めなかったからです。結果として、戦後は天皇なるものは「作為」されたもの、というタイプの議論がずっとなされてきた。プレゼンスとリプレゼンテーション、つまり実在と、それを再現したものの混同をどうやって切り離していくか、それがどの領域でも主題となり、その時に一つのツールになっていたのが、ジャック・デリダの「脱構築」だったわけですね。ですけれども、なにかも虚構になった今、それこそ「くらげなすただよへる」、実在的なものを欠いて大地にならずに、ずっと漂っている状態になっているというふうにも見える。そこで、改めて神話的なものに向き合って、自分の立ち位置というか地

面を作り直してみようというのが、天ヶ瀬先生のご報告だったと思うんです。もちろん学者はディシプリンの内部に所属していますが、それがどうやって出来てきたか改めて見なおす必要が生まれているということだと思いました。

天ヶ瀬先生があげられていたヘラクレイトスにとって重要なことは実在でも虚構でもないんですね。つまり、「この世界は流転している、生成変化の中にある」、そう主張した哲学者です。われわれもそうした第三の道、新しい学問的な「生成」を目指さなくてはならない。

もう一点、レジュメに戻ります。これもまたオーソドックスな比較ですが、新井白石と本居宣長の違いです。新井白石の学問はもちろん、江戸時代の権力に奉仕したものです。一方、本居宣長は意図してではないにしろ、権力を打倒する側に奉仕したものです。もちろん、ナショナリズムの起点にもなっていて、そこをどう考えるかというのがありますけど、ともあれ神と言っても二人の捉え方が全く違う。

新井白石は『古史通』の中で「神は人なり」と言っています。「太古朴陋の俗」を取り除きいかに常識に沿って読んでいくか。例えば、アマテラスのいた場所は高天原のような架空のものではなく、常陸のことであろう、と。こんな風に常識的に読みかえていく。

それに対して宣長は、「そのまま読め」という。つまりアマテラスは文字通り太陽のことであって、それ以外のものではないんだ、と。こういう素朴実在論にさえ聞こえるような、そんな言い方をする。

宣長と同じ頃、ヨーロッパで活躍していたジャン・バティスト・ヴィーコはこんなことを言っています。レジュメにある三つ目の引用ですが、「最初の人間たちは、自然本性からして、ありのままで偽るところのまったくない子供と同様、このうえなく単純素朴であった」。「そのため、最初の物語は虚偽をなにもひとつ作りあげることができなかった。ひいては、必然的に…、真実をありのまま偽らずに語ったものであった…」つまり宣長と同じことを言っているわけです。彼ならこれは「まごころ」ということになるんでしょうけれど、いずれにしても、そういう形で、ありのままを語ることの重要性が書かれているのが『新しい学』といわれている書物で、ヴィー

コは叙事詩に注目しながら、国民が形成されていく歴史を描いています。ちなみにさっき言ったデリダが、『グラマトロジーについて』で批判していたのが、ルソーとレヴィ・ストロースとソシュールですけど、注で主に批判しているのがヴィーコです。それに対して、最近はカンタン・メイヤスやグレアム・ハーマンなど、実在論に注目が集まりつつありますが、こういった虚構論から実在論にいたる人文学全般における研究動向といいますか、コントラストをはっきりさせておこう、というのが僕のコメンツの意図です。

西谷地：天ヶ瀬さんのご報告は、あらかじめ完成形ではないですが、メールでかなり詳しく内容を送って頂いてました。その時は、何が言いたいのか実は良く解らなかったんですが、今日のお話を聞いて、非常に良く解りました。ちょっと復習をしておきますと、前回一年前だったと思うのですが、未来学についての研究交流集会を行いました。

未来学というのは通常、未来社会について予想されることや、未来をどういう風にするのかを問う学問だろうと思います。実際一年前に僕は温暖化の話をしたんですけど、その中で、実際実現はしなかったのですが、学問としての未来が語れないだろうか、という提案をした記憶があります。で、今日の天ヶ瀬先生のお話っていうのは、心理学としての天ヶ瀬先生から見た未来の図式の、ベースになるものを考えて頂いたんだ、というのが良く解りました。あらかじめ貰っていたメールには、このあと「物語論をやろう」とって話があったものですから、ちょっとどうということなんだろうと解らなかったんですが、今日のお話は、現在の心理学に対する、天ヶ瀬さんの批判、それから何が徹底的に間違っているか、あるいは軽視されてきたのか、という話でした。「過去を放棄してきた」点、あるいは、「歴史を振り返っていない」という問題があるので、心理学が形成される古代ギリシアまで遡らないといかんのだ、ということで、古代ギリシアにおける、一つのキーワードは、「言語交換」というのがキーワードになってましたけども、それのかなり詳しい、最も新しい見解を整理されて、その中で言語交換がどうなっていて、そこからどういう風に心理学が立ち上がって来るのか、というのを素描されたお話だと思うんです。

で、非常に解りやすいお話だったのですが、最後のところは時間もありませんでしたので、今後の課題として簡単にされた部分、これからどうすべきなのか、というお話を、過去にまで遡って、古代ギリシアの段階まで遡ったうえで、もう一度学術的な心理学について、着目をした場合に、心理学の将来像っていうのがどういう風に描くことが出来るのかについて、今お考えの話があればちょっとお伺いしたいな、というのが一点です。

それから、田中先生の方は、神話論の話をされましたけれど、これは要するに、この会の前に何度かメールのやり取りをした時に、我々、僕もそうなんですが、天ヶ瀬さんは神話論と物語論という形で、今後の心理学を考えたいのかな、というふうにちょっと錯覚した部分がありまして、田中先生は歴史学の将来構想っていうよりも、より広い人文学における将来の課題の中で、天ヶ瀬さんとの共通点として、神話というのに着目して、急遽お話を作ってくれた、ということだと思います。それで、いいですか？

田中：いいです。その通りです。

西谷地：そういう形での、今日のお話だということですので、もちろんすべてのコースが、未来学の授業を担当するっていう原案は無しになりましたので、それぞれの学問の未来像みたいなものを、必ずしも未来学の中に入れこまなきゃいけない、というわけではないんですが、今日の天ヶ瀬さんの心理学の問題点と今後の課題については、一つのアプローチとして、非常に面白いと思っていましたので、ぜひ、天ヶ瀬さんの考えているもう一つの心理学みたいなかたちの像があれば、教えて頂きたいと思います。

田中：僕が司会をするんですけどね。

西谷地：そうです。

天ヶ瀬：田中先生からは、人文学における共通点となる話題として神話論を問われ、西谷地先生からは、人文学の1事例または1領域としての、天ヶ瀬が考える今後の心理学を問われたのですが、本日の話は両方の展開の準備です。ところで、古代ギリシアにおいてミュトスとは、物語全般を指していましたので、神話と物語をあまり区別せずに用いていました。神話論や物語論ならば、田中先生と同様に、文学部で共有できる話題だと考えています。今後の

心理学としては、物語論の心理学は既にあり、今後とも展開するでしょうが、むしろ生の実像に迫るドキュメンタリーや社会的な苦境にある人々のドキュメンタリーとしての可能性を考えています。同時に、学術による本来的な言語交換を明らかにしたうえで、心理学がそのような可能性を追求し、学術による言語交換を再び活性化することが、ひいては、人文学が人間とその社会の未来を切り開く道であるとも考えます。

心理学が事実学そして技術論になっていることは、心理学自体によって問題視されたものではありません。たとえば、社会学者ニコラス・ローズ(Rose)が、20世紀において心理学が統治術となってきたことに対して批判をしました。彼は「魂を統治する」という言葉を遣って厳しく批判しました。それは、第二次世界大戦の戦時下における民衆の統制にはじまり、20世紀後半の、政治経済、そして、家庭での生活や教育の細部まで、心理学が統治術として使われているという指摘です。現在ではさらに事態は進んで、認知心理学者ダニエル・カーネマン(Kahneman)や、行動経済学者リチャード・セイラー(Thaler)が、ノーベル経済学賞を受賞しています。つまり、経済行動において人々をコントロールする効力のある、心理学的技術が完成しつつある状況だということです。その中で戦うには、今後の心理学が、技術学とならずに、様々な状況における、現実の人間の生そのものを見詰め、いかに伝えていけるか、ということだと考えています。

精神医学者で心理学者のアーサー・クラインマン(Kleinman)は、発展途上国で貧困に苦しむ人々一人ひとりに対して、先進国のすべての人間一人ひとりが責任を持っていると言っています。発展途上国の人々の飢餓や戦争の苦しみ、それは先進諸国によってもたらされた、ソーシャルサファリングだと主張しています。では、そのソーシャルサファリングに対して、私たちはいかに責任を果たしていくかを問うときに、彼らが取った方法は、発展途上国等で苦しんでいる、人々のその生の声をそのまま伝えていくという作業、ドキュメンタリーをして、先進諸国の人々に考えさせようとしています。現在、たとえば、資産100万ドル以上の「ニューリッチ」、つまり、株成金が、世界全体で千百万人とも言われて

います。彼らは、途上国の状況や世界情勢と隔絶して優雅に暮し、自分たちだけのネットワークで仮想の国「リッチスタン」を形成しているという見方もあります。それらの人たちに、いかに富の再分配に応じてもらうかは、制度や法を超えた問題になります。その時に、一つの方法として、彼らがソーシャルサファリングという事態に、直接的に向き合っていくことが、重要だと考えます。彼らだけでなく、ソーシャルサファリングの現実を、世界全体、とりわけ先進国民全体が直視することが大切です。そのために、心理学や人文学が役割を果たせるのではないかと考えています。法や制度を超えた社会的問題において、これまでの長い人類史における言語交換を、もう一度活性化させること、そのことにおいて、文学部内で協働できないかというのが、私の考えです。

田中先生からの表象文化論についての問いですが、実は、最近、学生指導での必要から、東浩紀の動物化論を読み直し、田中先生が言った表象文化論が現在どうなっているかについて、私なりに考えていました。現在のところ、それは物語の消費にしかならなかったと、私は思わざるをえません。「これは面白い。あれは面白くない。」と言っているだけです。たとえば、「オタク」と自称するあるいは他称される人たちが、「この物語は面白い。」と言いついても、結局、彼らは言い争うことはしません。消費した結果として満足や不満の評価をお互い語り合うだけで、物語による快楽に対する欲求はあっても、それぞれの物語が、人間にとって、社会にとって有する意味について議論し合って、賛同を得ようとする、あるいは、考え直してもらおうとするような、相手に対する欲望が存在しない。文芸作品でさえ、消費されるにすぎない。研究によってサブカルチャーが掘り起こされても、文化のヘゲモニーを動揺もしくは転倒させるような、ダイナミズムを生み出していない。その状況で私たちは、学生たちに対してしようとしているように思います。

ここで話したような講義を、学生にもしているのですが、その授業の最後のレポートで、「心理学は人の心に響かない」と書いてありました。そして、「それはなぜか。それは学問だから。学問は人の心に響かない。」と書いてありました。あまり説明がなく、論理的でもないのですが、正確に理解できないのですが、

よく解釈すれば、学術をしている者たちに対する批判です。悪く解釈すれば、学生たちは、もはや大学に学問をしに来てはいない恐れがあることを、感じました。その状況で、私たちがこれからどうやっていくかを、みなさんと協働したいということが、本日一番の主眼になっています。

これでお答えできたと思うのですが、よろしいでしょうか。新井白石と本居宣長の神話解釈についての田中先生の問いは、難しいので、少し考えさせてください。

田中：有難うございました。西谷地さんからはいかがでしょうか。

西谷地：今ので大変良く解ったのですが、一例として文学部において物語論を王権闘争との絡みでやってみたらどうだろうかという指令があがっていたのですが、必ずしも、言語交換の代表として物語論が全てだ、という話ではなかった、と。

天ヶ瀬：はい、そうですね。一つの方法です。

田中：バシレウス、シャーマン、戦士それぞれの言語交換のあり方、それが悲劇だったり喜劇だったりを生む。あるいはそれが王権に繋がっていく。大事な話で、おそらくこういう話を心理学でしていただけるなら、歴史学からも協同的にアプローチできることがあると思います。例えば明治維新であれば、ビッグマン、つまり近江商人的なものが出てくる。それに対して、旧来の戦士(武士)たちはちがう形の権威を作ろうとする。そう見ていけば、明治維新はイリアスにおける言語交換の構造とパラレルな部分がある。

天ヶ瀬：近江商人は「三方よし」の倫理観を持っていたので、むしろ明治政府に後から参入した薩長の若者たちかもしれません。維新の苦勞をせず、薩長出というだけで新政府に参入した人たちが、ビッグマン化したとも考えられます。富国強兵そして戦争への道です。西洋近代でも、ビッグマンの問題が大きくなったのは19世紀の後半で、キリスト教が信用されなくなってくると、キリスト教道徳を捨てて、隣人を酷使して金もうけに走る新々ブルジョアジーたちが出て来ます。じゃあ、その金持ちたち、成金たちをどのように道徳化していくかということが、知識人たちの課題になりました。キリスト教はもはや無理だということになったときに、出てきた

のが、ニーチェやバタイユだったのだと考えています。ニーチェは、要するに、「超人」を目標として、「古代ギリシアの英雄みたいな気前のよさで生きなさい。あなたは普通の人間ではなくて、優れた人間であるから、優れた人間である以上は、富も出し惜しみせずに、皆に配りなさい。」と説いているのだと、私は解釈します。バタイユは、ポトラッチを取り上げて、経済学のトリクルダウン理論と勘違いされるところがあるのですが、生物の物質代謝のような、社会の代謝原理として、ポトラッチが重要だと説いて、やはり貧富の差の拡大という問題に対処しようとした。キリスト教道徳が失われた状況において、心理学による新たな倫理で対応するのか、新たな文化の形成で対応するのかの違いはありますが、同じ危機感にあったのだと思います。ニーチェは心理学で考えたと思っています。

田中：なるほど。

もう一つ、ちょっと興味があつたのは、ピタゴラスは人文学者なんだと。なにもかも数学化してしまうピタゴラスには科学者の一面もあると思うのですが、そのあたりはいかがでしょうか。

天ヶ瀬：ピタゴラス像は、ここに書いてあるように、ブルーノ・チェントローネ(Centrone)の本が元になっているのですが、実はあまりよくわかっていません。ただ、輪廻転生を説いたと言われていることは、はっきりしている。輪廻転生を何度もしたので、儀式・儀礼についての知識を多く持っていて、提供していたということです。そして、「ハルモニア」、調和の訴えをした。秩序を訴えたということです。物質的富の放棄も訴えています。その辺りを見ると、シャーマンもしくは族長系の人なのですが、一般的には、ピタゴラスは数学者であると見られています。それでも、たとえば、知り合いの数学科の教授が、改組の時に、私たちは文学部に行きたいと、冗談交じりにこぼされたことがあります。何故なら、「本が大切。」「私たちは本があればいいのです。」とっていました。数学にはそのような側面があります。もっとも、ピタゴラス派がしたのは数秘術であり、数の中に神秘的な意味を見出していく術です。たとえば、「テトラクテュス」、ポーリングの10本のピンの並べ方と同じ、10の点の並びです。正三角形になりますが、三方の角のいずれから見て

も、1つの点、2つの点、3つの点、4つの点が平行に並んでいます。見事な調和です。そして、全体で10。「1から10まで」とは、全てのことを言いますが、ピュタゴラス派は、テトラクテュスは宇宙を表すと言うのです。さらに、1は「根源」を表して、2は「対立」を表して、というように、数の意味体系を説明して行きます。それは経験科学的な自然学ではなく、調和のための知識学だと考えます。

田中：万物の根源を論じた、ある意味で科学に近いアナクシマンドロスやタレスらと対照的だと。

天ヶ瀬：そうですね。はい。

田中：一方でニーチェはソクラテス以降の哲学を批判して、それ以前の、今日から見て自然科学に近い議論を反対に評価しているわけですね。そのあたりの繋がりはどうでしょうか。

今日のお話ではプラトンやアリストテレスに至って、心理学に到達したという議論になっていましたが、ニーチェのストーリーと天ヶ瀬さんのストーリーとのあいだに齟齬はないのでしょうか。

天ヶ瀬：ニーチェは屈折した人だと思います。英雄とか超人とか言っているのですが、実は彼の視線の先には常に弱い立場の人たちがいて、その人たちを、偽善ではなしに、どうやって救うかということを、考えていたのだと私は解釈しています。彼は、自分のことを心理学者と、何回もいろんなところで言っていますが、彼の言う心理学者の意味は、古代のギリシアにおける英雄たちのような、気風のよい、気前のよい人間として振る舞うことを訴える者、人間の気高い精神のあり方を訴える者ということです。キリスト教信者には、最後の審判で救われたいという無意識の意向があって、隣人愛のふりをする者がいる。そういうことを暴き立てたうえで、そうではない英雄や超人としての倫理を主張するわけです。これは、もはやキリスト教を顧みることのない、新々ブルジョアつまり成金たちに対して、キリスト教道徳ではなくて、「あなたたちは、それだけ優れた能力を持って、優れたものがあるのならば、英雄のように振る舞いなさい。」と、持って回った言い方をして、彼らの倫理観を創ろうとしたのだと考えています。ですから、これは、やり方としては、アリストテレスと実は同じですが、ニーチェは、プラトンに貴族趣味的なところを看取していて、しかも、プラ

トンはキリスト教道徳と直結していますから、それをまずキャンセルして、それより以前に遡ろうとしたと考えます。

田中：なるほど。キリスト教道徳については色々と議論はあるところだと思うのですが、そろそろ会場からは、いかがでしょうか？

鈴木（広）：シンプルな話。今日の話聞いて、一番凄く疑問に思ったのは、ずっと聞いていれば解るのだろうけれど、天ヶ瀬さんにとってそもそも、通常の心理学ってわけでは無いなというのは解るんです。じゃあ、ではその心理学ということについて、一言何を言わんとしていたのかを、最初に知りたかったということがあるのです。そこをまず起点にすると、議論は、ひょっとしたら永遠に続くかもしれないですが、その点をちょっとまず仰って頂けませんか。そうじゃないと、通常の意味で違うことは解っていても、何を言わんとしていたのかわからない。それは、言ってみれば、学術とか、その思考とかが、未分化な、未分化と言っただけなんです、現代とは知的な編成の在り方が違う時代、そこまで遡らせて、そこからまず一回考えてみましょう、というこの意味みたいなのは理解しています。それで、いいんですよね。違いますか。

天ヶ瀬：はい。一つは、これは別に心理学に限らず、学術が全般的に、政治経済の道具とされていきます。だから、文学部でも、コンテンツを発掘しましょうとかになっていったりします。それに対して、理学部は、研究がいずれは技術開発につながる可能性もあることから、純粋な興味で自然を探究しているという言説をします。しかし、自然科学ですら、元々はそうじゃなかったことを確認したかったのです。私たちがいかに生きていくべきか、いかに生きようとするかに、すべての学術がかかわっている、ということの確認です。心理学が、19世紀に、学術間闘争から、事実学・技術論へと追いやられていったところを、もう一度問い直して、学術全体で、人間がいかに生きるかということを考えていく文化を、再構築しようと言いたかったのです。

鈴木（広）：そこら辺は解って聞いたんですが、問題はそうすると、心理学というタームは何を他から区別して、そこで光を当てるなりしようとするのか、ということ、だからずっと聞きたかったのです。

天ヶ瀬：本来学術は、分断できないと考えています。分断された現在において、協働するとしても、そこにおいてどこまでが心理学で、どこからは心理学ではない、とうことは必要ないと考えています。では、心理学としてのアイデンティティを問われるかもしれませんが、文学部全体として、大学全体として、人間がよりよく生きるための、社会的課題に取り組んでいくことに参加できれば、私はそれでいいと考えています。

鈴木（広）：なんか誤魔化されている感がすごい。これは僕の中でもやもやしているんですけど、ちょっと僕もすぐには言いづらいのですが、こちらへんで。

田中：他にいかがでしょうか。

どこからでも、何でもいいと思います。報告は多岐に渡っていたと思います。

柳澤：話を言語交換に戻してもいいですか。やっぱり両義的に聞こえるというか、つまり、あるべき言語交換とか、あるいは治療薬としての言語交換とか、望ましい言語交換のやり方と違ってというようなものを見ながら語っている部分と、振り返って、たとえばギリシアの権力闘争を言語交換というかたちで読んだ、というのと。それは、いろんな詐術としても現れるし、先ほどの話であれば、消費にも繋がるような、そういうレベルの話でもある。言語交換、あるいは心理学と言い換えてもいいのですが、たとえばニューリッチにどうやって分配に応じてもらうのかという時に、ニューリッチが分配したくなるような気持ちにさせる、そういう心理学的仕掛けを動員するという話と、いやそうじゃなくて、そういうやり方じゃないかたちで、ニューリッチに応じてもらうには、どうしたらいいか考えたいんだ、と言うときに考えている心理学と、どのように差別化されて、その時に働いている原理みたいなものは、本質的にどう区別されるのか。そのあたりを、もうちょっと聞かせて頂きたいところです。

天ヶ瀬：自由意志の問題がかかわってくるのですが、カント的には、それは相手を手段として使ってはいけないという倫理になりますね。その時に、いままでのようにコントロールするかたちで考えるのではなく、ニューリッチの人を例として挙げれば、「なるほど。わかった。では、私の判断として、私の意思として」、自由意志が本当にあるかどうかの問題

がありますが、法的強制ではなく、「私の意思として、それをやりましょう。」となるように説得するのが、本来の心理学であると、私は思っています。

柳澤：そんな風に本人が思ってくれるようなやり方でやるのが上手なやり方だ、というのが今話している心理学じゃないのですか。

天ヶ瀬：もっともな指摘だと思います。そこのところで、やはり倫理が問われるわけです。カント流の倫理を取るか、ベンサム流の倫理をとるのかで、違ってくるところがあるのですが、少なくともベンサム流の倫理はとらない。でも、カント流の倫理で言ったら、柳澤先生のご指摘の通り、難しい問題があると思います。

柳澤：なるほど。

天ヶ瀬：ご指摘の通り両義的であり、難しい問題だと思っています。

田中：他にいかがでしょうか。

野村：この内容を概論でなさっているというふうに伺ったんですけど、最初に一回生とか二回生とかが入ってきて、心理学というものに、こんなものだというふうに思っている、その社会的にも本人も思い込んでいるようなものと、対峙しながら講義をなさっているわけですね。そういう時の、注意されていることとか、あるいは学生にどこまで何を解ってもらおうとしているのか。そのあたりを少しお聞かせ頂けないでしょうか。

つまり、その過去を放棄してきたっていうような心理学は、過去を放棄してきたんだ、という批判精神を言う時に、今の心理学の在り方っていうのかね、そういうものを整理してみせる必要があるんだと思うんですけど、そこのところ、門外漢にもわかりやすく教えて頂けないでしょうか。

天ヶ瀬：まず、学生たちに、「心理学とは、どういうものだと思いますか」という問いや、「心とは、何だと思いますか」という問いをして、調査をして一応把握します。そして、「皆さん、こう考えていますね」という確認をします。それで、全般的にそう言われているところと、現在の学術心理学や臨床心理学がどういうものか、概要を最初のほうの授業で話します。そして、「けれども、それは、必ずしもずっと心理学であったわけではないのです」として、心理学史をはじめていくことにします。

もう一つは、「日本での、心についての考え方は、西洋とは違うのです」という話もします。「皆さんが考えているのは、日本における現代の人たちの見方で、心を考えているのだけど、同じ日本でも、それは江戸時代とか、いろんな時代とかで、だいぶズレがありますね」という話もします。「じゃあ、そもそもどうだったんだろう。」というかたちで導入を図って、やっています。

そのあと、2回に一つの割合で、小レポートを書いてもらっていますが、提出者全員に十分なコメントを書いて、できるだけ質問や対話ができるようにして、何とかやっています。しかし、学生がそれでどれだけ理解するかというと、難しいです。ただし、科目担当の責任としては、公認心理師のような資格ができてきますと、オーソドキシシーを教えなきゃいけないということがありますので、それは確保しています。なので、そこの難しさは有るのですが、でも、「一般的な概論で語られることに対して、批判も持ちましょう」というかたちで講義しています。

田中：他にいかがでしょうか。もし何もないければ、僕から一点だけ。僕、なんでリプレゼンテーションって話をしたかと言うと、心理学といえどももちろん心理をあつかうわけですが、心理って基本的に見えないもので、リプレゼンテーションから心理を探っていくやり方を取ってきた。その意味で表象文化論的なものに乗かって議論してきた、という傾向はあったと思うんですね。ですから今、神話をあらためて解釈し直すことは、リプレゼンタティブなものの見方と同じであってはならないと思うわけです。そのあたりのことについて、もし天ヶ瀬さんのほうで何か見通しがあれば。

天ヶ瀬：リプレゼンテーションは、元を辿れば、古代ギリシアの「ミメシス」で、真似による再現です。プラトンは『ポリテイア』のなかでミメシスを批判して、「詩人追放」という、悪名高い議論に至ります。「かの崇高なる哲学者プラトンが、なぜ詩人を追放せよと言ったのか。」古典学などにおいて大きな謎とされてきました。古典学者のエリック・ハヴロックは、「詩というものは、感情に訴えて、感情で人を動かそうとする。哲学者は論理で行こうとするので、それを批判したのだ。」と、1960年代の議論ですが、言っています。それに対して、ここでの議論で言う

と、詩人たちによる悲劇が、「再現であるということ、ミメシスがいかに」だ」と、プラトンは『ポリテイア』でソクラテスに何度も言わせていますが、「感情的であるから、いかん」とは言わせていません。むしろ、「子供の頃は、感性によって導くのが良い。」というような、発達心理学的な教育論も展開しています。彼が批判しているのは、リプレゼンテーション、すなわち、誰かの行為の再現というかたちでやられるような、詩すなわち悲劇では、それによって新たな何かを創っていくことは、できないという批判だと思います。

文学部は、従来のようにリプレゼンテーション自体を解明するのではなく、たとえば、消費文化に代わる、文化を創設していくような方法を、取らなければいけないということです。今日の話の中心にあった、言語交換ということ、そのなかで特に重視

しているのは、ヘラクレイトスの言説です。彼の言うロゴスは、言語交換と言い換えても、ほぼ意味は通じると思っています。彼の言うロゴスは、「動的平衡」と訳するのが一番良いように思いますが、色々な言葉のやりとりがあって、その中でせめぎあいをしていくのだということを、主張しています。

田中：なるほど。僕も同感です。では、これで時間だそうなので、今日の研究交流集会は終わりということにいたします。急遽司会になって、不手際が沢山あったと思いますが、どうもありがとうございました。

注) この特集記事は、平成30年3月6日に開催された、奈良女子大学文学部研究交流集会における報告と対話を、口調や語句等を整えて掲載したものです。